

# リコーアニエクスグループ会誌 San-ai

1977 APRIL No. 82

特集 ● 野心—見直される若いエネルギーを探る—  
わが子にあたえる手作りの童話



# お母さんがたの童話発表

本誌創刊30周年記念として募集しました“わが子にあたえる手作りの童話”は、リコー三愛グループ会員会社社員のご家族から多数の佳作・力作が寄せられました。なかにはおひとりで数編の作品を寄せられた社員夫人もあり、編集部としてはその全部をご紹介したかったのですが、紙面の都合でそれも許されず、たいへん残念でした。ここに掲載しました5編は、特にすぐれた作品という

よりは、文章面にも構成にも難はあるが、独創性において他より抜きんでているとされたものです。選考にあたっては公平を期すため、作者名も所属もはずし、童話作家と有名幼稚園のベテラン保母さんに“する立場”と“与える立場”から選んでいただきました。坪田譲治の門下で最近大活躍の童話作家・竹崎有斐氏には、寸評をお願いしました。

絵——山中冬児

## 大きなパン

あるところに、ひとりの

おばあさんが すんで いました。

おばあさんは、パンが すきで、

まいにち パンを つくつて

おりました。



300

あるとき、おばあさんが、

パンを　かまどに　いれると、

もこもこ　しました。

かまどから　かべに　つきました。

つぎは、てんじょうを　こわしました。

そして、とうとう　おばあさんの

家は　こわれて　しました。

でも、パンは　こわれて　いません。

パンの　いいにおいて、むらの  
ひとたちが、あつまつて　きました。

そして、パンに　はしごを　かけて  
パンを　たべました。

そして、おれいに、おばあさんの

おうちを　なおして　くれました。

でも、おばあさんは、

「もう　こんなこと　ないほうが

いい。」と　いいました　とき。



# オレンジいろの ぼうし



まゆみちゃんは、どこやへいくのが だ  
いきらいでした。しろいうわぎをきた おじ

さんは、おいしゃさまみたいで  
こわいので はさみのお  
とも きらいなのです。だから まゆみちや

んのかみのけは、いつもながいまでした。  
かたにふれるくらいあります。

「どこやさんがいやなら、おかあさんのいく  
びよういんへいきましょう」

と、おかあさんがいいました。でも まゆ

みちゃんは うごきません。  
「どつちもきらい！ このままでいいわ」

「そんなら、おうちで おかあさんに きつ  
てもらいたい」

と、おとうさんがいました。

「うん」

まゆみちゃんは につこりして、じぶんで  
はさみや くしを よういしました。あかる  
くて かぜとおしのいい えんがわにすわる  
と、おかあさんが、しろいおおきなかたかけ  
を、まゆみちゃんの くびに まいてくれま  
した。

「あまりみじかく しないでね。みみがでた  
ら いやよ」

「はいはい、かしこまりました。おきやくさま」  
まゆみちゃんのちゅうもんに、おかあさん  
も しんけんな かおをしました。

「さあ、まえがみをきりますから、めを つ

むりましょ」

おかあさんでは やさしくて、いいにお  
いがします。すずしいかぜがふいて、めをつ  
むつていると ねむくなります。ジョキジョ  
キなる はさみのおとも、ちつともいやでは  
ありません。おかあさんが よこや うしろ  
へ まわつても、まゆみちゃんは じつと  
めをつむつていました。とてもいいきもちです。  
「さ、こつちをむいて。めを あけてごらん  
なさい」

やがて、おかあさんがいました。めをあ

けると、おおきなかがみがあつて、そこにま  
ゆみちゃんが うつっていました。さつぱり  
と みじかになりましたが、よくみると、か  
たほうが すこしながいようです。

「あら、みぎのほうが すこしながいわね」  
おかあさんもきがつきました。まゆみちゃ  
んは また めをつむりました。

「こんどは、いいでしよう」

めをあけると、まだすこし へんです。お  
かさんは、あわてました。

「あら、こんどは ひだりね。きりすぎたみ  
たい」

まゆみちゃんは、しんぱいになりました。  
かたほうのみみが ちよつと みえるのです。  
それでもがまんして、まためをつむりました。

「これでおしまい。おまちどうさま……」

まゆみちゃんは、ぱつと かがみをみまし  
た。りょうほうのみみが でているではあり  
ませんか。おかあさんは、こまつたかおをし  
ています。まゆみちゃんのために、みるみるな  
みだが あふれてきました。

どう」

まゆみちゃんは、びつくりしました。オレ  
ンジいろのひもは、ゆうべまで、テーブルの  
うえにありました。ひとばんで、おかあさん  
があんぐれたのです。ひさしがおりかえし  
になつた そのぼうしは、ひやけした まゆ  
みちゃんのかおに ぴつたりでした。

「このぼうしをかぶつて、あそびにいくわ」

まゆみちゃんは、ないたこともわすれて、  
おかあさんのまわりを、ぴょんぴょん はね  
まわりました。

のです。そのばん、まゆみちゃんは、こわい  
ゆめをみました。おおきなはさみのおばけが、  
おいかけてくるのです。ようちえんのおとも  
だちは、みんなにげたのに、まゆみちゃんは、  
ちつともはれません。

あさになりました。ねていたのは、まゆみ  
ちゃんだけです。おきてすぐ かがみをみま  
した。りょうほうのみみは でたままです。  
いくらかみのけをひつぱつても、すこしもな  
がくなりません。またなきたくなりました。  
「まゆみ、このぼうしをかぶつてごらん」

おかあさんが、おへやへ はいつてきまし  
た。てにオレンジいろの かわいいぼうし  
をもつてします。ビニールのひもであんだ、  
とてもすてきなぼうしです。

「みじかいおかみに、とてもよくにあうのよ

う」

まゆみちゃんは、びつくりしました。オレ  
ンジいろのひもは、ゆうべまで、テーブルの  
うえにありました。ひとばんで、おかあさん  
があんぐれたのです。ひさしがおりかえし  
になつた そのぼうしは、ひやけした まゆ  
みちゃんのかおに ぴつたりでした。

「このぼうしをかぶつて、あそびにいくわ」

まゆみちゃんは、ないたこともわすれて、  
おかあさんのまわりを、ぴょんぴょん はね  
まわりました。

# とられた おへソ



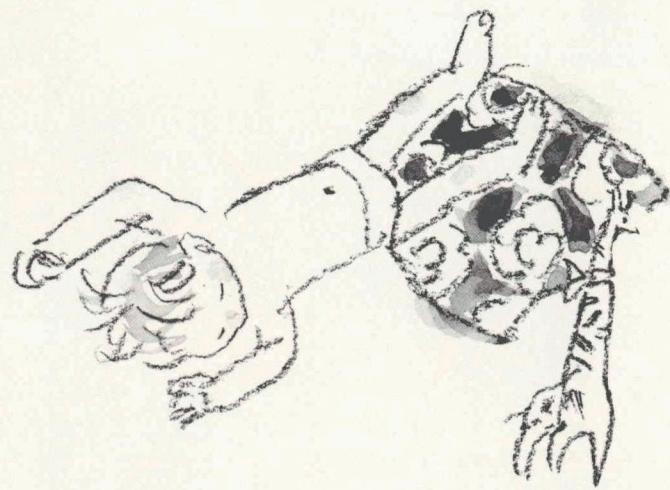
雨がふっています。まあくんはお昼寝です。  
「夏は暑いから、お昼寝をしないといけない  
のよ。」つて、おかあさんはいつもいうんです。  
「いちばん暑いときに、おそとにいると、日  
射病になつてしまふんだよ。」つて、おとうさ  
んがおしえてくれたんです。だから、まあく  
んはお昼寝をしています。でも…今日は雨。  
雷サマまで、ピカピカツ!! ゴロゴロ…つて、  
とてもこわくなっちゃいます。

あれっ!? お昼寝しているまあくんたら、  
おへソが見えてる。ホラ、よくいうでしょう。

雷サマにおへソをとられてしまうから、おな  
かをだして寝てはダメって。まあくんも、お  
かあさんにいわれるんです。「ちゃんと、タオ  
ルをかけてねないと、おへソをとられてしま  
うのよ。」つて。でも、まあくんは、そんな話  
ほんとうは信じていらないんです。

——僕のこと子供だから、あんなこといつて  
こわがらせようとしてるんだ。ちゃんと、僕  
にはわかるんだ—— だから、まあくんは、  
何もかけずに、そのままお昼寝しちゃった  
しまつて、ちょっとふきげんです。

「あれっ? おじさんだあれ? 人のおうち  
にはいつてくるなんて、いくらおそとが雨で  
も、ダメじゃないか。」と、まあくんが大男  
をみると、あらあら、大男はトラの皮のパン  
ツを一枚はいているだけなのです。まあくん、



びつくりして、「なんていうかつこうをしてるの。そんなかつこうをしていたら、かぜをひいちゃうよ。」といつて、ひよつと気がつく

と、その大男のおなかには、おへソがみえないのです。サア大変、まあくんは、もうすっかりびつくりしてしまって、さつきのふきげんもふつとんじやいました。

「おじさん、おじさん、大変だよ。どうしたの、おじさんのおなかにはおへソがないよ。」

「なにッ！」オレサマにへソがないつて。と

大男はいうと、へんなふうにニヤリとわらい

「それならばぼうず、おまえのへソをオレサマにくれ。」つていうんです。それは、それは

大きな声で…。でも、まあくんは「いやだい、これは僕のおへソだもん。それに、そんなに

かんたんにおへソはとつたりつけたりできな

いんだぞ。」つて、少しこわくなつたけどいい返しました。「なにおッ！」よこせ、よこせ、

オレサマにへソをよこせ。」大男は大きな声

を出して、のつしのつしと、まあくんのそばへよつてきます。「やだい、やだい」もう、

まあくんは泣きべそをかいています。すると急に大男はやさしい声になつて「そうか、それならばぼうずの知つているやつで、オレサ

マにへソをくれそうのはいないか。いるならば、おまえのへソはとらずにいてやろう。」といひはじめました。まあくんは、いつしょ

うけんめい考えました。

「そうだ！ 雷サマにもらえればいいよ。おかあさんがいつてたよ。雷サマは人のおへソを

とつちやうつて。だからきつと、たくさんもつてははずだよ。ネ、ひとつもらえればいいじやない。おじさんも、そんなかつこうをして

あくんは、自分のおへソをとられないよう、いつしようけんめいそういいました。すると、大男はとつぜん大声で笑いだしました。

「ワツハツハツハ。ワツハツハ。よく聞け、ぼうず。オレサマにはもともとへソなんかな

いんだ。いいか、オレサマが雷なんだゾ！」

このごろはみんながオレサマをこわがつて、

おやのいうことをよくきくから、うまそくな

へソがなかなかみつけられない。ところがど

うだ。おまえが、おなかをだしてきもちよさ

そうにねてるじゃないか。オレサマは、はじめからおまえのへソをめあてに雲の上からおりてきたんだ。にがしはしないぞ…！」ワツ

ハツハ。」

「た、たすけて…。ご、ごめんなさい。ぼく、おかあさんのいうことをきかなかつたわけじゃないんだ。ただ…ただ…。」

「うるさいつ！」ヘツヘツヘ、うまそくなへソだ。へソをとられたら、おまえもオレサマみたいに人のへソをさがしてあるく雷になつ

てしまふんだ。ワツハツハツ…えーい、ドー

ン、ゴロゴロツ、ピカピカツ!!

ものすごい音と光とともに大男はみえなくなりました。

まあくんは、あわてておなかに手をやつて、おへソをまもろうとしたのですけど、まあくんがさわったおなかは、ツルツルで、さつきみた雷サマのおなかみたいでした。

えーん、えーん。あーん、あーん――。

「まあくん、まあくん、どうしたの。」おかあさんの声です。

「あつ、おかあさん。ぼ、ぼく、おいしいつけちやんとまもるよ。だから、雷サマからおへソをかえしてもらつてよ。ぼく、雷サマになんかなりたくないよ。えーん…。」

「あら、あら、まあくんたら、おなかをだしてねていたから、雷サマにおへソをとられちやつたと思ったのね。でも、だいじょうぶよ。おかあさんがちゃんとタオルをかけてあげましたからね。」おかあさんは、やさしくわら

いながらいました。

まあくんがベソをかきかき、きがつくと、おなかのうえにはきちんとタオルがかかつていました。おそるおそるタオルをどかしてみると…おなかのまんなかには、おへソがちやーんとありました。

雨もどうやら、やんだようです。